

隅っこに強く息を吐きかけるとそこに出てきた靄に急いで何事か殴り書きしました。

「朔」
「朔」
私はその言葉を鏡越しに読むと、少女に向かってつぶやきました。

少女にはどうやら私が少女の名前が読み取ることができたのが伝わったようでした。その少女がひどく嬉しそうに自身の名前を繰り返して笑うのが私に届いたからです。私は何度も少女の名前をつぶやきました。そのたびに少女はその表情を嬉しさに満たしながら鏡の向こうから私に笑いかけてくれたので、私はみぞおちにそれまでに経験したことがないうねりを感じました。

その時ふと、私はもう日が暮れてから大分経ってしまっていることに気が付きました。外からは夜行の動物の鳴き声が聞こえます。父は私がいないことで心配している時分だろうと思つた私は目ぶり手ぶりでもう帰らなくてはならないことを少女に伝えました。父は私が何を言っているのか分からない様子でしたが、扉を開け外へ出てしまつた景色を見せると、どうやらわたしたちの伝えたいことが分かつてくれようでした。少女はひどく悲しそうな表情をしましたが、私は少女に「また明日も来るから」とだけ伝えようと、どうやら少女は私の言いたいことをわかつてくれたようでした。私は御扉を開けるとすつかり暗くなつてしまつた外へと出ました。そしてゆつくりと扉を閉めました。その間も少女は最後まで私を見つめていました。

家に帰るとちょうど家の者たちは食事の用意をしている所でした。お手伝いさんに何か手伝えることはあるかと聞くともうすぐできるので大丈夫ですよとの返事だったので、私はひとり困り裏のそばによつてさつき出会つた少女のことを考えていました。私はもしかすると夏の暑さにやられて朦朧とした意識の中夢を見たのではないかと考えていました。文字通り雪のように白い肌や額を見ていまして、食事の時になつて、私は上座に座り食事をしている父におり、私が生きている世界とはまったく異なる世界の中を生きているように感じたのでした。食事の時になつて、私は上座に座り食事をしている父に尋ねてみました。

「そういえば父様。僕は今日村のはずれで女の子を見たよ。」
「そうかい、どの辺りでした？」
「川を越えたずつと向こうの所。」
「私とはつきましました。」

「そうか、」
父は私をまだじつと見つめていましたが、やがて自分の食事に目を落としました。
父は川の向こうには時折野伏の人らが山を越えるために山道を進んでいくからな。野伏の人の娘さんだったかもね。」

私はそれから何回も、自分の時間を見つけては彼女に会いに神社へといきましました。はじめのうちには彼女の存在が信じられず、あんな少女のこともしませんでした。私の見た夢でいつの間にか消えてしまふのではないかと思つていきましたが、何回訪れても彼女は鏡の中で温かい瞳で私を出迎えてくれました。私を見つめると嬉しくなり、少女のそばへと駆け寄つていくのが常でした。辺りには彼女、朔が、外の世界を非常に知りたがっているように思えました。私は彼女の喜ぶ顔を見たくて様々なものを持つていきましました。辺りの田園風景を描いたスケッチ、家にあるやかんや仏の置物等です。それらひとつひとつに朔は好奇の視線を向けていきます。ひとつひとつに指をさし、何をするためのものなのかを尋ねてくる仕事をするので私はそのたびに道具を手に取り朔に示してやりましました。

特に朔は写真や絵画に興味を示しました。当時写真はひどく高価で私の家にもあまりなかつたので、私はまわりの自然の風景を描いて彼女に見せていきましました。緑々と生い茂る樹々や隆々と流れる川の力強い流れ、どこまでも続く穏やかな田園風景。そのどれもが朔の興味を引いてくれたようでした。私はまた朔の姿をスケッチし床の上に座りこちらを向いて姿勢を正してくれましました。私はあまり絵が得意ではありませんでしたが、当時の私の

技量が許す限りで鏡の上に映る少女をなるべく細に描写しました。直接比喩のついでにはないのですが、朔の身長は私より少し高いくらいでした。黒い髪は姿勢を正すと腰まで届く程度で、朔の少し細めの体を完全に覆ってしまおうのではないかと考えました。少し無で肩の緩やかな傾斜は、鏡面上の微細な傷跡の上になだらかな丘陵を作り出して完成した作品の鏡の姿を描くのは心が満たさるような感じでした。幼いゆえの拙い描写でしたが、朔はそれをみると何時もうれしそうにしてくれたので私も彼女の姿を描写するのは心が満たさるような感じでした。

私はいつも床に座って鏡に半身を預けて寄り添いながら、描いたスケッチの数々を朔に見せていました。そんな時は鏡に身体を預けつつ腰を埃まみれの床におろし、背中越しにスケッチの興味深そうに眺めるのでした。私が朔にもよく見えるようにしてやると、鏡に両手をついたまま私の背を近づけその線をのぞきこみます。私はそんな様子を見えようとして鏡に近づけず、有咲は鏡の境際まで顔を手を重ねてくれたまま。その手は私のものよりすこしだけ小さく、そして折れかたを握り、鏡に近づかず、有咲は鏡の境際まで顔を手を近づけてくれませんでした。私はそのまゝ鏡に寄り添い、唇が段々と近づいていき、鏡の表面に自分の額を押し当てました。彼女は少し驚いたよ、私の真似をして自分の額を私のそれと合ませました。顔と唇が段々と近づいていき、鏡の表面に自分の額を押し当てました。彼女は少し驚いたよ、うでしたが、やがて私にも私のそれと同じことを返してくれました。実り豊かな豊稷の日、そんな日々が続いていきました。

季節が廻り月日が流れていきました。私はその日も同じように神社の御扉を開け朔の居る鏡の傍らに腰掛けました。私はその日冒険小説を持ってきていたので、鏡にもたれかけつつ中の文章を一緒に読んでいきました。父は悲しそうな表情を浮かべると、すぐに私のそばに駆け寄って来ました。

「ここにきてはいけないと言ったのに。」

父はすぐ私を床から引き起こすと、そのまま私を連れて本殿から外へ出ていきました。そしてしばらく私の手を取ったまま走っていました。神社の境内から鳥居をくぐって外へ出ると私を地面に立たせて顔を覗き込みました。そしてしばらく私の手を取ったまま走っていました。父は聡明だがお前はもうあの子には会えないよ。もうここへ来てはいけません。ここで見たことはすべて忘れなさい。」

それだけ言うと、父は私を連れて家路へと歩き始めました。

「父様、あの女の子は、連れて家路へと歩き始めました。」

しかし父は私の言うことには答えない。また黙々と家路の道を急いで行きました。家に帰ってくると父はお手伝いさんに何か伝えてから私の方を向き直って

「紀伊さんの手伝いをなさい。」

とだけ言いまして、そのまま後を追うことはできませんでした。父が帰って来たのはその夜、ずっと月も深く沈んでからでした。姿はもう遠くに行ってしまっただけで、追いかけては来ませんでした。

あくる日、私は家の仕事の手伝いを終わらせてから家の中に父の居ないのを確かめて、こっそりと出かけてきました。杉の木の森を超え神社へとどりに着きます。神社は昨日私が訪れた時と変わっていませんでした。私のはたまたま鳥居をくぐり参道を通って扉を開けた。殿の空間の中、私は中央に置かれた鏡を覆う布を大きくひきました。そこには私の姿が映っていました。彼女の姿はどにも見えません。私は鏡をのぞきこみ指でたたく鏡を覗きこむように息を吐きかけてみました。私は鏡の前でも何の反応もないまま、彼女が現れないかとずっと待っていました。気が付くと夕日は沈み、山の厳しさが辺りに響き渡ります。私は鏡の前でも何の反応もないまま、彼女が現れないかとずっと遠くから鏡の中を覗いていました。姿を見せたくは、私が鏡の前でも何の反応もないまま、彼女が現れないかとずっと遠くから鏡の中を覗いていました。姿を見せたくは、私が鏡の前でも何の反応もないまま、彼女が現れないかとずっと遠くから鏡の中を覗いていました。

「おいで、聡明。もう夜も深い。月も傾きつつある。寒くなってきたから風邪をひいてしまふ。」

私は父に誘われるまま、月光で仄かに照らされる境内へと連れ出されました。

